

## 「カトリック新聞」遠藤周作関連記事一覧：昭和二年一月～昭和四九年一二月

池田，静香  
九州産業大学：特任講師

<https://doi.org/10.15017/4783638>

---

出版情報：九大日文. 39, pp.2-18, 2022-03-31. Association of Japanese Literature, Kyushu University  
バージョン：  
権利関係：

# 「カトリック新聞」 遠藤周作 関連記事一覧

— 昭和二二年一月〜昭和四九年十二月 —

池田 静香  
Ikebana Shizuko

○、はじめに

本稿は、「カトリック新聞」昭和二二年一月〜昭和四九年一月二月における遠藤周作に関連する記事をまとめたものである。

「カトリック新聞」を繰った最初の動機は、長崎市遠藤周作文学館在職中に担当した平成二〇年から開催された第五回企画展「遠藤周作とフランス」の企画展示制作にあたって、昭和二五年、戦後初のカトリック留学生として遠藤がフランスに渡った経緯を報じる資料を探すことにあつた<sup>①</sup>。続いて、平成二四年開催の第七回企画展「遠藤周作と長崎——心の鍵が合う街——準備の折、『沈黙』（新潮社、昭和四一・三）に対するカトリック教会からの反響が、教義レベルではない生活の側面において僅かでも垣間見える教会側からの資料はないものだろうかと思ひ、四年前と同様休日を利用して、カトリック信者の家庭向け新聞である「カトリック新聞」の調査を実施した。企画展に活かせないまま職を辞したのだが、昭和六二年『沈黙』の文学碑が建立

された際には一部の住民が拒絶反応を示した長崎（外海）<sup>②</sup>で、文学館開館から一〇年以上が経過した平成二五年あたりには地元で好意的に受け止められているように見受けられるその変化を、少しでも明らかにする傍証を求め、この度「カトリック新聞」における遠藤周作関連記事の調査に再び着手した。調査期間には、国立国会図書館が原紙で所蔵する昭和二二年一月から文学館が開館する平成二二年までを予定している。

先の問いにマッチした調査かどうかは今後精査を必要とするが、いくつかの興味深い記事に巡り合うこともできた。また、本紙はデータベース化されていないため、遠藤周作の関連記事一覧を作成することにも多少の意義はあると考える。そこで、本稿では、前半部分となる昭和四九年までの遠藤周作関連記事をとまとめる。なお、残念ながら遺漏もあるかと思う。新たな記事が確認できた際は続報にて補いたい。

## 一、単行本等未所収初期の著作について

本調査における最大の収穫は、これまでほとんど存在を知られてこなかった昭和二二・二三年に発表された著作——記事としては八件、著作としては五件——を確認できたことである。遠藤が慶應義塾大学文学部仏文科を卒業する学年から卒業した年にかけて発表されたもので、フランス文学の現状を扱ったもの（『佛カトリック文壇 大戦後の新旧作家の消息』昭和二二・九・一四）、フランソワ・モーリヤックの作品紹介（『モーリヤックの新作の中

より(一)(二)「昭和二三・一一・二三、三〇、小説「フェアリザイ女」(二)「昭和二三・五・二、九、シャルル・ベギイの現代的意義を論じたもの(大戦とベギイ 手紙(一)(二)「昭和二三・九・五、一九、フランス文学を背景とした日本近代文学解説(「日本近代の形成」昭和二三・九・一二)となつてゐる。一記事につき一二〇〇〜二五〇〇字程度とはいへ、モリーヤックに関しては、当時の洋書入手の困難さを憂えながらも近作の「愛しえぬ人々」や翻訳されていなかつた「フェアリザイ女」<sup>(3)</sup>を採り上げ、アメリカでのベギイの現代的隆盛について紹介した記事では、機会あつて知人にベギイに関する叢書を借りて読むことができたことなども記されており、当時の読書環境をわずかながらだが窺い知ることが出来るものにもなつてゐる。

なかでも、昭和二二年九月一四日に掲載された「佛カトリック文壇 新旧作家の消息」は、没後、「新たな処女作」<sup>(4)</sup>として単行本収録された上智学院から出されていた雑誌に掲載された評論「フランス・カトリック文学展望——ベルナノスと悪魔」(『望樓』昭和二三・八)から後れることひと月半程度、神西清に認められ、評論家として活動していくきっかけとなつた作者公認の処女作「神々と神と」(『四季』昭和二二・一二)、恩師佐藤朔の推挙で執筆した「カトリック作家の問題」(『三田文学』昭和二二・一二)よりひと月半程度早く発表されている。遠藤の没後、「神々と神と」以前の著作については、年譜上の一八歳の空白を明らかにすることと併せ、飛躍的に調査が進められた。そして改めて、一八歳当時、上智大学予科に在籍していたこと、そ

の短い在籍期間に評論「形而上の神、宗教的の神」(『上智』昭和一六・一二)を発表していたことが、研究上の共通認識となつた<sup>(5)</sup>。当時の状況を綿密に調査した山根道公は、『遠藤周作——その人生と『沈黙』の真実』(朝文社、平成一七・三)において「神を身をもつて実感したいと祈り、魂を満たす神の实在感を求めるカトリック青年であつたこと」が読み取れる処女評論「形而上の神、宗教的の神」は、遠藤の「その後の文学的生涯を貫くものであつた」と指摘している<sup>(6)</sup>。「神々と神と」が抱える汎神論的世界と一神論的世界の対立というテーマでは取りこぼされてしまふ「神の实在感」の掌握という遠藤文学を通底するもう一つのテーマが訴えられている、上智に在籍したからこそ書かれたこの評論を、生前の遠藤はなぜ公にしたがらなかつたのか。

その理由について調査した先行研究は、先の山根論を嚆矢とし、主なものに加藤宗哉の『遠藤周作』(慶應義塾大学出版会、平成一六・一〇)、久松健一『原稿の下に隠されしもの』(笠間書院、平成二九・七)がある。いずれの先行論も、遠藤が上智に在籍した理由に、母郁と、遠藤が上智大学予科に入学した年に上智に赴任した郁の精神的指導司祭であつたヘルツォグ神父の存在を挙げる。更に、生前の遠藤が上智への在籍や当時の評論について語らなかつた理由に、母が尊敬するヘルツォグ神父のような強者になれないばかりか、「魂を満たす神の实在」を感じられずに上智退学に至つたであろう点をみている<sup>(7)</sup>。また久松は、「フランス・カトリック文学展望——ベルナノスと悪魔」の発表媒体も、上智学院内の書院であることに着目している<sup>(8)</sup>。

慶應大学在学中の「カトリック新聞」への寄稿について、遠藤が語らなかつたのは小文だからということもあろう。だが、上智在学中の評論への先行研究から翻つて考えると、山根が「遠藤母子とヘルツォグ神父との実際の体験（池田注、遠藤が上智予科に在籍していた経緯）が変形されて投影されている」<sup>(9)</sup>と指摘する長編「火山」（『文学界』昭和三四・一〜一〇）に、信者一般の認識として、「自分たちの教会と自分たちの主任司祭が（池田注、カトリック）新聞面に掲載されることはどの信者にとつても悦びであり誇りだった」<sup>(10)</sup>という記述があることが、まずは興味深くみえてくる。

記事内容や「カトリック新聞」と当時の遠藤との関係についての調査分析は今後の課題としたいが、近年刊行された『遠藤周作全日記』（河出書房、平成三〇、五）がフランス留学開始の昭和二五年から始まっていること、「神々と神と」発表前後の昭和二二〜二三年の著作はアクセスが容易いものが少ないこと<sup>(11)</sup>を考慮すれば、短い寄稿五件でもこの時期の作者の動向を窺える活字資料を確認できたことは、望外の成果であつたと考える。

## 二、母郁に関連して

記事一覧のなかには、母郁に関するものも含めた。遠藤作品において母の存在が欠かせない要素であることは周知のとおりだが、昭和二九年一月二十九日に五九歳で急逝した母についての寄稿「写真に寄せて 遠藤郁子さん」（昭和三〇・四・一七）に

は、郁の略歴とその人柄が紹介されており、「子息の仏文学者、周作氏が『裏切られても、裏切られても愛さずにはいられない』といわれる通り、郁子さんの生涯を貫くものは、その性格の烈しきから多くの誤解を招くことはあつたにしてもたゞ『愛』の一言につきていた」と綴られている。寄稿した池淵鈴江は、郁と同じく安藤幸に師事した人物を従姉に持つ人物で（安藤幸子先生のこと）（カトリック新聞）昭和三八・三・三三）、『世紀』に「聖書の中の女性たち」<sup>(12)</sup>（角川書店、昭和三五・一二）についての好意的な随想なども発表している。

広告欄には、遠藤の「赤ゲットの佛蘭西旅行」（カトリックダイジェスト）昭和二六・一〜昭和二七・七）、「続赤ゲットの佛蘭西旅行」（カトリックダイジェスト）昭和二八・四〜二九）があつた。『カトリックダイジェスト』は、ヘルツォグ神父が日本版編集長兼発行者を務め、「赤ゲットの佛蘭西旅行」連載第二回目となる昭和二六年一月月号からは郁が顧問に名を連ねる。寄稿「写真に寄せて 遠藤郁子さん」でもこの雑誌のことは触れられており、『ダイジェスト』の事務所起居されるようになってから「も」とある<sup>(13)</sup>。周知のとおり、フランス留学前の遠藤にとつて、『カトリックダイジェスト』の編集を手伝うことが、鎌倉文庫での嘱託と同じく生活の糧でもあり、胸を病んでフランスから帰国した昭和二八年には、本調子ではない身体で編集長を務め、先の「続赤ゲットの佛蘭西旅行」を執筆してもいる。

フランスから書き送った「赤ゲットの佛蘭西旅行」は全九回のうち六回がタイトルと内容をまとめた短文を添えて広告にな

っていた。なお、同誌の広告に著者名の掲載がないのは他の掲載記事についても同様である。また、郁に代わって遠藤が編集長を務めた時期の「続赤ゲットの佛蘭西旅行」は全九回のうち七回がタイトルと筆者名で広告となっていたが、この時期の広告は、遠藤が日本の読者の現状を意識した雑誌を目指して編集していたと推察される日本人の執筆陣<sup>(4)</sup>は筆者名が載り、そうでない場合は筆者名の掲載はなされないという方針のように見受けられる。

この他、昭和三〇年六月五日には、郁が訳したヘルツォグ神父の著書『聖心における黙想』（ドン・ボスコ社）の広告もあったが、残念ながら現物にたどり着くことはできなかった<sup>(5)</sup>。

### 三、遠藤文学をめぐって——『沈黙』『死海のほとり』『イエスの生涯』を中心に

調査対象期間は、慶應義塾大学在学中の評論家デビュー前後から『死海のほとり』（新潮社、昭和四八・六）『イエスの生涯』（新潮社、昭和四八・一〇）上梓の翌年までである。この期間の紙面で最も遠藤文学を語るのは、遠藤研究の重要な基礎参考文献でもある『遠藤周作の世界』（中央出版社、昭和四五・九）『遠藤周作の文学』（聖文舎、昭和五〇・九）を有し、遠藤作品の読み巧者でよき伴走者であった武田友寿である。少しでも遠藤について触れたものも含めれば一〇件の寄稿、そして、『遠藤周作の世界』で亀井賞を受賞した際のインタビュー（昭和四五・一二・二〇）も

ある<sup>(6)</sup>。武田の寄稿が増えるのは昭和四四年あたりといえる。

全体的な流れへの考察は今後の課題とし、まずは、『沈黙』と『死海のほとり』『イエスの生涯』の報じられ方について、まとめておきたい。踏絵の許容、神が沈黙を破る点を中心としたカトリック内部での『沈黙』への非難については、作者存命の折から伝説的に語り継がれる出来事である。平成二三年頃、「カトリック新聞」調査を実施した目的も、遠藤が『沈黙』について釈明した討論会について図録に活用できればと思つてのことだった。遠藤の弟子である加藤宗哉の述懐する「作者を呼びつけたの（略）討論会」<sup>(7)</sup>と一致するかは定かではないものの、例えば、遠藤が「キリストの愛の日本における受肉について」をテーマとして自作『沈黙』について語つた講演会（六月一日、東京新宿区恵の園カルチャーセンター）の記録が二度に亘つて掲載されている（昭和四一・六・二六、七・一七）。短いとはいえ六月二十六日付け記事は、「遠藤氏が哲学者でもなく神学者でない作家であることを考慮に入れてきかなければ、或いは聞き誤る点が生じかねないふんい気もあった。」としつつも、「当日の聴衆は信仰について判つていても、文学についてのよい理解者とはいえない面もあった」と遠藤を擁護し、参加者の声として「日本という特殊な風土を考慮し、キリストの愛の本質を曲げることなく日本的なものを創造する遠藤氏の努力には、一様に共感する」<sup>(8)</sup>旨が伝えられ、今後、カトリック国際援助会図書館主催で、「わたしの小説」をテーマとした遠藤の講演会を開くことを伝えている。この恵の園カルチャーセンターでの講演会内容

の詳細は、「素顔／精神的泥沼への踏み石 問題作『沈黙』を書いた遠藤氏」として、書き手の評価を極力抑えた文体で七月一七日に掲載されている。

刊行当時の『沈黙』の受け止められ方を調査した先行研究に、増田斎「踏絵」と（転向）の交差 遠藤周作『沈黙』と大阪万博キリスト教館出展問題」（坪井秀人編『戦後日本文化再考』三人社、令和一・一〇所収）がある。増田は、「カトリック新聞」に信者による好意的な『沈黙』評が掲載されていることに着目する。その『沈黙』評は、先述した遠藤による『沈黙』講演会と同時期に掲載された読者投稿欄「声」に載ったもので、昭和四一年五月二二日、六月二六日に掲載された東京都在住の高校教師による「沈黙 評と、同じく六月二六日掲載の東京都の主婦による「沈黙」と黄金の国」を指す。高校教師は、『沈黙』に対し「殉教者を見世物にして市価を高らしめていると思うと、たまらなく腹が立った（略）しかし、実際は作者はやはり自分を処刑していたのだ」、「反カトリックかと思う言辞のおく、カトリック信仰がかくされている」、「第一級のカトリック文学」であることに気づいたと記す。また主婦は、『沈黙』について「作家というものはある意味ではデモンだと思えます。人の心をこれほどまでにずたずたに切りさいてみなければならぬのか」と嘆きつつも、ユダへの謎が解けた気がすると『沈黙』の読後感を記し、「黄金の国」（『文藝』昭和四一・五）について、片岡弥吉が問題視した、百姓の悲哀を根拠とする司祭の棄教<sup>(19)</sup>に感動を覚えたことを綴っている。遠藤の没後、妻の順子が「こ

の間まで私が通っていた教会では『沈黙』はいまたに禁書なんですよ<sup>(20)</sup>」と発言したことを思えば、好意的な読者投稿の掲載は、増田の指摘通り特筆に値するだろう。

増田はこの読者投稿が『カトリック生活』昭和四七年四月号で問題視されたことも指摘し、サレジオ会士アロイジオ・デルコルが『沈黙』に対し、「一般読者は、これをよんで、どんな印象をうけるだろうか？」と疑問を呈し、編集長サレジオ会士フェデリコ・バルバロは、いまなお『沈黙』に好意的な記事を掲載するカトリック系の雑誌や新聞に対して、（略）「抗議」し続ける姿勢を明らかにしている<sup>(21)</sup>。先の『沈黙』に対する読者投稿が『カトリック生活』で問題視されたことはその通りだが、「カトリック新聞」には『沈黙』への批判ともとれる読者投稿があることにも着目しておきたい。遠藤の名前も『沈黙』のタイトルも文面に表れないが、踏絵の場面で神が沈黙を破った点を批判していると読める「神の沈黙について」と題した読者投稿が昭和四一年八月一四日に掲載されている。また先述したように、『沈黙』について語った講演会の記事には開催経緯が報じられるため、批判的な内容も含まれてはいる。それでもなお『カトリック生活』がかように非難するのは、好意的な意見が掲載されるという背景に、「ひと握りの聖職者たちの（略）声を大にして『沈黙』擁護を述べるわけにはいかなかった」様子<sup>(22)</sup>が垣間見えるからであろうか。推測の域を出ないが、まずは『カトリック生活』の「カトリック新聞」批判が、『沈黙』刊行から六年を経た昭和四七年になされていることに

も着目したい。

昭和四七年は、キリシタン関係遺品が再び注目を集めた年でもある。『東京国立博物館図版目録 キリシタン関係遺品篇』昭和四七・一)の編集刊行と併せ、特別陳列が企画された。図版目録作成・展示に携わった江口正一による寄稿(生々しい追書秘めた踏絵や殉教者の遺品 昭和四七・一・二三)には、真鍮踏絵の写真も大きく掲載されている。また昭和四六年には『沈黙』の取材記『切支丹の里』(人文書院 昭和四六・一)が刊行され、篠田正浩監督による映画『沈黙』も公開された。そうしたなか、先の江口の寄稿の隣には、遠藤による「踏絵」も掲載されている。

『沈黙』で問題視された棄教の場面に對する遠藤の思いが綴られた小文だが、遠藤の著作物を、遠藤が昭和三九年からともに活動してきた心のともしび運動を行うYBU善き牧者運動本部が提供したという形で掲載している。これは、上梓以降続くカトリック内部の『沈黙』バッシングへの対応として必要とされたとみるべきであろうか。先のデルコル神父の批判は、寄稿「踏絵」、その提供元へも及んでいる。

先述したように、昭和四七年四月号の『カトリック生活』が『沈黙』に好意的な媒体を非難するのは「一般読者」への影響を問題視してのことである。『沈黙』発表当時は『沈黙』に好意的な読者投稿も掲載し、痛烈な『沈黙』批判を掲載しなかった「カトリック新聞」だが、昭和四八年に刊行された『死海のほとり』(新潮社、昭和四八・六)『イエスの生涯』(新潮社、昭和四八・一〇)については、神学的立場から直截的な疑問を提出し、『カ

トリック生活』と同様に聖職者ではない読者への影響を心配している。

門脇佳吉「注意すべき小説の一面性 遠藤周作の『死海のほとり』」(昭和四八・八・五)、堀田雄康『死海のほとり』のイエズス像―聖書研究者の立場から(二)―(四)―(昭和四八・八・一九)九・一六)、門脇佳吉「遠藤周作 イエスの生涯」(昭和四八・一一・二五)と続く。門脇神父は、遠藤が代父となつた加賀乙彦の受洗にあたり疑問を受けとめた人物であり、堀田神父は「文学界」昭和四九年新春特別号の座談会「なぜ「イエス」を書くか―『死海のほとり』『或る聖書』をめぐって―」に同席した神父である。両者とも、『死海のほとり』『イエスの生涯』いずれについても、小説として読む場合と聖書に照らして考える場合の二つの読み方を示し、最後は神父としての立場からの希望―イエスにおける弱さの強調の危険―を綴る。

また、遠藤が昭和三九年から協力する心のともしび運動を主宰するハヤット神父が疑問を呈するのも、『死海のほとり』『イエスの生涯』が描く奇跡を行うことができないイエス像の是非であり、特に復活という最大の奇跡を否定しているとすれば、ハヤット神父は、「遠藤さんの間違いを指摘したい」「奇跡を否定するのは間違い」だと訴える。遠藤は復活は否定していないことを強調するが、誤解されないよう書くのが小説家の責任だと論されている。何より、ハヤット神父から遠藤の説明を聞けば間違っていないと分かるが、「読者に神学的誤解を与えないで欲しい」と願われる点は、『カトリック生活』の『沈黙』批判

と同質であろう。これは、小説として読んだ場合にも疑問が残るといふ門脇神父の注文にも当てはまる。

昭和四七年三月、遠藤はローマ法王パウロ六世に謁見し、「日本の他宗教と協力して働いてほしい」との言葉を受けた。<sup>(23)</sup> 教会のために働くという点においてであれば、昭和四五年には、大衆伝道の目的も担った大阪万博キリスト教館のプロデューサーを務め、その働きを認められてローマ法王庁から騎士勲章も授与されている。「カトリック新聞」においては『沈黙』講演会について報じた記事（昭和四一・六・二六）で、信仰と文学の問題を分けて考えようとする傾向もみられたが、教会側の活用もあるなかで、この時期には遠藤作品の影響力がより問題視されるようになっていく側面もあるのだろう。

『沈黙』発表直後の上智大学での討論会の様子が『週刊新潮』（昭和四一・七・一六）に掲載されている。そこで遠藤は、信者以外の読者の受け止め方を大事に考えている旨述べ、「文学として読む」ことを求めた。この姿勢が継続されているとすれば、聖書の根幹ともいうべき復活の否定とも取れる『死海のほとり』『イエスの生涯』は、『沈黙』に比較的好意的だった「カトリック新聞」でも疑問を提示せねばならなかったといえようか。

とはいえ、昭和四九年三月一〇日掲載の「遠藤周作氏の評判——ベストセラーの秘密伝える「フィデス」」では、バチカンの福音伝道聖省が発行する国際ニュースサービス「フィデス」が、遠藤の『イエスの生涯』が日本で週刊ベストセラーのトップを二週連続で飾ったことを採り上げ、キリスト教を取り扱っ

た作品がキリスト教とは縁遠い日本でなぜベストセラーになるのか解説していることを報じている。そこでは、「この作品の第一の強みは、用いられた素材が研究しぬかれていることだ。著者はフラビウス・ヨゼフス、ギユンター・ボルンカム、ルドルフ・ブルトマンを含む歴史家、神学者の書物を入念に研究している。彼は聖書学者の業績に依拠している」と、遠藤の聖書研究を褒め称えている。

なお、作品ではないが、早いものでは助野健太郎が「キリシタン小説と演劇と」（昭和三三・九・二二）で、「先日遠藤周作さんに会った時、浦上信者の流配地となつた津和野の乙女峠のことをテーマにした小説を書きたいといつておられた」と、遠藤の名を挙げている。<sup>(24)</sup>

#### 四、大阪万博キリスト教館に関連して

遠藤が、昭和四五年に開催された大阪万博キリスト教館のプロデューサーの依頼を受けたのは、昭和四三年五月頃のことだ。三浦朱門、阪田寛夫とともにこの「慣れぬ仕事を引きうけたのは、一つにはこれが日本ではじめての旧教、新教合同の事業であると知ったから」だといふ。<sup>(25)</sup> 遠藤がプロデューサーに迎えられる理由についての考察は、先に挙げた増田斎の論文に詳しい。増田は、『沈黙』でカトリック教会から神学的批判に晒された経緯を持つ遠藤が、キリスト教館の公的プロデューサーに任命されたのは、キリスト教館の展出目的である「大衆伝道」



のための広告塔機能、「第二公会議後のエキキュメニカル運動の推進」のための『沈黙』利用にあるとする<sup>(26)</sup>。

遠藤がプロデューサーの依頼を受けたであろう昭和四三年五月頃には、「祈り働く教会の姿を 万国博 キリスト教館の理念」の見出しで、「カトリック側としての理念を相談する万博博対策カトリック特別委員会の会合」が四月下旬に開かれ、「キリスト教館の理念」の「基礎的な線」が整ったことが報じられている<sup>(27)</sup>。そうしたなか、昭和四三年五月二六日のコラム欄「地の塩」には、布教の有効な手段となるカトリック出版界における作家の活躍を期待する内容が掲載された。

「望楼」で犬養道子さんが、「カトリック・ダイジェスト」で遠藤周作氏が、「世紀」で曾野綾子さんが書きはじめたころ、その新鮮な筆致がカトリック文筆界に新風をもたらしたのであったが、これらの人たちはいずれも、文筆家としての素質を他の世界で発揮している▼それはそれで結構なのだけれども、今ここで想うのは、これら二つの世界のギャップが少し広すぎるのではないかということなのだ。こういう第一線の文筆家たちにカトリック出版界から執筆を願うのがかなりむずかしいということが、そのギャップの広さを事実として語っているといえる。<sup>(28)</sup>

大阪万博キリスト教館出展が計画され、遠藤がプロデューサーを打診された頃、文学の世界で活躍するキリスト教作家を布

教に役立てたいと考えていたことが窺えるだろう。

むろん、教会が是とするかどうかは別としても、『沈黙』執筆にあたって布教意識があったことは遠藤の認めるところである<sup>(29)</sup>。また、昭和三九年には遠藤や曾野綾子が、ハヤット神父が始めたテレビ・ラジオを通じた伝道活動「心のともしび運動」に積極的に関わっていた。このコラムの末尾が、カトリック出版界における良書が一般にはほとんど知られていないことを憂え「出版布教関係者の反省を強いる」と結ばれていることを考慮すれば、カトリック作家に「執筆を願うのがかなりむずかしい」と綴る背景には、出版布教関係者側のネックが意識されていたと推測されるが、この記事の後、昭和四四年あたりから、武田友寿によって文学の世界と宗教の世界を橋渡す文芸記事が増えていく点に、興味深さを覚える。

なお、大阪万博に関する記事のなかには、キリスト教館への感想が綴られたものが一件あった。当時、東宮侍従であった浜尾実による「万国博キリスト教館 訪ねてみた感想 沈黙だけでは意味がない」(昭和四五・六・七)である。プロデューサーがキリスト教館の中心に据えた「沈黙の間」を意識しての見出しだが、作務的な見出しのように感じる。

周知のとおり、「沈黙の間」は科学技術の進歩を競う万国博のパヴァイリオンのなかで、そうした進歩や繁栄の意味を自分自身に語りかける「聖なる空間」を設けるために設けられ、そこまでの動線も、「沈黙の間」までの通路には人々に自己をIMPOSER(池田注、課する・負わせる)するべき心の準備のもの(池

田注、ヴァチカン美術館秘蔵のラファエロの織物など」が置かれる「構造になつていた」<sup>(30)</sup>。見出しがとられたであろう箇所は、以下である。

喧騒とあわただしさの他のパビリオンから、この「キリスト教館」に入ると、心の平静をとりもどし、ほつとすることは確かだが、何も生み出さない沈黙では意味がないし、内容のない祈りもまた、真の祈りではない。／そこには、考えるべき材料と、祈るべき目的がほしい。／あらゆる余計なものを、けずりにけずつて、簡素そのものにされた場所では、私など中味が貧しいものには、考えたり、祈つたりする、取りかかりがないので、かえつてまどうのである。<sup>(31)</sup>

浜尾が「何も生み出さない沈黙では意味がない」、「考えるべき材料と、祈るべき目的がほしい」というのは、三月に訪れた際には、沈黙の間までの動線に置かれた「折角のラファエルの絵にも、作者の名も題名も、どこにも書いていないし、知らない人が見たら、なんだかちつともわからなかつたろう」と思つたからである。だがこの記事は、その後二回の訪問を重ねた印象を述べたものである。一月後の四月には、「ラファエルの名前と題名とが明記されていて、(略)そこからいろいろと思ひめぐらす出発点となつた」ことや、シスターによるキリスト教関係書籍の展示即売の様子を見て「キリスト教を全く知らない人でも、この機会に本を読んでみよう」と思うだろうと嬉しく思

い、五月にはプロテスト・カトリック合同礼拝から聴こえてくる聖歌を耳にして、「祈りを心から天に向かって叫んだ」と記されている。

万国博の会期は、三月一五日から九月一三日までである。オープン当初の準備不足への指摘は否めないにしても、浜尾の総じての感想はプロデューサーの意図に沿つたものに近い。また、浜尾は会場に足を運ぶたび、「この万国博に来るすべての人が、真理の港と、信仰の一致とに帰ることができ、やがては、一人の牧者、一つの群れとなることができよう」と祈るとも綴る。そうした訪問記に対し、不満を述べた三月の印象に焦点化し「沈黙だけでは意味がない」との見出しがつけられたのは、キリスト教館が「キリスト教徒以外の人々にどのように受け止められる可能性が高いのか」という布教を念頭においた懸念のほうが、強く作用したと考えるべきであろうか。

とはいえ、「カトリック新聞」で「沈黙の間」の意義が繰り返し報じられただけでなく、事前に「読売新聞」<sup>(32)</sup>やテレビ出演を通して、「沈黙の間」の意義を説明してきていることを想起すれば、複雑な背景を感じる。

## 五、まとめ

調査対象期間における遠藤関連記事を、「単行本等未所収初期作品」「母郁」「遠藤文学をめぐって——『沈黙』『死海のほとり』『イエスの生涯』を中心に」「大阪万国博キリスト教館」

を軸に、簡単に紹介してきた。文学館が開館する平成一二年までをひとまずの対象期間として調査を継続し、「カトリック新聞」における遠藤文学の捉えられ方の変遷を辿ってみたい。

なお、次章に列挙する遠藤周作関連記事一覧は、遠藤の名前、もしくは作品について触れたものは確認できた限り採り、大阪万博キリスト教館に関する記事については、名前かプロデューサーとして掲載されているものを採った。

年代の若い順に並べ、同日掲載記事は、掲載面が若いものを先とした。見出しはなるべく省略せずに採ったが、内容が判りづらい記事は、末尾に(※)として内容を示し、筆者がわかる記事は、末尾に○で括って示した。また、広告は冒頭に「(広告)」と示し、広告情報として掲載された遠藤に関連する記事を末尾に○で括って記した(「赤ゲットの佛蘭西旅行」(続赤ゲットの佛蘭西旅行)は省略)。なお、広告のうち、遠藤著作については著者名を省き、同一タイトルの広告については、一番若い項以外は出版社等を省略した。

## 六、「カトリック新聞」(昭和三年一月～昭和四九年二月) 遠藤周作関連記事一覧

昭和二年 九月一四日 佛カトリック文壇 大戦後の新旧作  
家の消息／(遠藤周作)  
一 一月二三日 感銘深い新戯曲 モーリヤックの  
新作の中より／(遠藤周作)

一 一月三〇日 愛は苦悩の中に モーリヤックの新  
作より(二)／(遠藤周作)

昭和三年 五月 二日 小説「フアリザイ女」 モーリヤック  
の新作紹介／(遠藤周作)

五月 九日 小説「フアリザイ女」 モーリヤック  
の新作紹介(二)／(遠藤周作)

六月二三日 文化消息 雑誌

九月五日 霊性の優位強調 “大戦とベギイ”

手紙(二)／(遠藤周作)

九月二二日 日本近代の形成——文学的領域の素

描／(遠藤周作)

九月二九日 精神的諸徳と文化“大戦とベギイ”

手紙(二)／(遠藤周作)

昭和四年 四月一〇日 アンテナ(※野村英夫遺稿・追悼文)

一 二月一日 文化消息 雑誌(※「ネオトミニズム

の詩論」)

一 二月二八日 生活費は仏国信者が負担 フランス

留学の招き 初春に十余名門出か

昭和五年 六月一八日 教会短信／四学生欧州留学

昭和六年 一月二五日 (広告)『カトリックダイジェスト』

クリスマス特集号

一 二月二日 (広告)『カトダイ』クリスマス特集

号

一 二月二三日 (広告)『カトダイ』一月号

昭和二十七年

一月二七日 (広告) 『カトダイ』 二月号

四月 六日 (広告) 『カトダイ』 四月号

四月一三日 (広告) 『カトダイ』 四月号

五月 四日 (広告) 『カトダイ』 五月号

六月 八日 (広告) 『カトダイ』 六月号

六月二九日 (広告) 『カトダイ』 七月号

七月 六日 (広告) 『カトダイ』 七月号

昭和二十八年

三月二九日 (広告) 『カトダイ』 四月号

五月 三日 (広告) 『カトダイ』 五月号

八月 二日 (広告) 『カトダイ』 八月号

九月 六日 (広告) 『カトダイ』 九月号

九月二七日 (広告) 『カトダイ』 一〇月号

一一月 一日 (広告) 『カトダイ』 一一月号

一一月二九日 (広告) 『カトダイ』 クリスマス号

昭和三〇年

四月一七日 写真に寄せて／遠藤郁子さん／(池淵鈴江)

六月 五日 (広告) ヘルツォーグ著 『聖心について』の黙想』 遠藤郁訳 (ドン・ボスコ社)

九月一八日 芥川賞受賞作 『白い人』について 異常心理を通じ、罪という大問題に／(A・I生)

昭和三十一年  
昭和三十三年

五月 六日 カトリック作家の悩み／(遠藤周作)  
六月二九日 (広告) 『世紀』 百号 (主な執筆者)

七月 六日 (広告) 『世紀』 百号 (二つの反省から)

七月一三日 (広告) 『世紀』 百号

七月二〇日 (広告) 『世紀』 百号

七月二七日 (広告) 『世紀』 百号

八月 三日 (広告) 『世紀』 百号

八月一七日 (広告) 『世紀』 百号

九月一四日 日本とカトリシズム——「世紀」第百号記念特集を読んで／(長島達也)

九月二二日 キリシタン小説と演劇と／(助野健太郎)

昭和三十六年

三月一九日 (広告) 『世紀』 四月号 (池淵鈴江「主

における共感——「聖書の中の女性たち」随想)

三月二六日 (広告) 『世紀』 四月号

四月 二日 (広告) 『世紀』 四月号

四月 九日 (広告) 『世紀』 四月号

四月一六日 (広告) 『世紀』 四月号

昭和三九年

二月一六日 素顔／積極的な信者生活を そのあり方を語る、三浦朱門氏

四月一三日 (広告) 『わたし』が・棄てた・女』文藝春秋新社 (※作者のことば)

四月二六日 (広告) 『世紀』 五月号 (岩瀬孝・遠藤周作・三浦朱門「現代作家・小説・信

仰)

昭和四〇年  
五月 三日 (広告) 『世紀』 五月号  
五月三〇日 (広告) 『世紀』 六月号 (座談会「日本人の生活とキリスト教」)

六月 六日 (広告) 『世紀』 六月号

一一月二一日 “心のともしび” テレビ東京(12)

昭和四一年  
一月 二日 電波こぼれ話／(川隅)(※心のともしび)

三月二三日 四月一〇日ご復活祭号より連載  
小説 悪いヤツ 三浦朱門

五月二二日 声／網も破れるほどに——「沈黙」  
評——／(田中捨彦)

六月二六日 声／フェレイラとは? 「沈黙」評／  
(田中捨彦)

声／“沈黙”と“黄金の国”／  
(小島静子)

“沈黙”の作者・遠藤周作氏講演  
会(広告) 『世紀』 七月号(粕谷甲一)

「沈黙」について)

七月一七日 (広告) 『あけぼの』 八月号(佐々木  
孝「神の「沈黙」とは? 遠藤周作氏の近  
作をめぐって」)

素顔／精神的泥沼への踏み石

問題作” 沈黙”を書いた遠藤氏

七月二四日 (広告) 『世紀』 八月号(「沈黙」の

神学的批判をめぐって)

八月 七日 (広告) 『世紀』 八月号

八月二四日 (広告) 『世紀』 八月号

八月二一日 (広告) 『世紀』 九月号(佐古純一郎  
「沈黙」について)

九月 四日 (広告) 『世紀』 九月号

昭和四二年  
五月二一日 催し／遠藤周作氏講演”ちかごろ考  
えていること”

六月 四日 燭台／宗教と文学／(武田友寿)

昭和四三年  
五月二六日 地の塩／(J)

(広告) 『キリストカトリック 喜び  
のおとずれ』カトリック思想普及社

(※遠藤執筆)

昭和四四年  
三月 九日 “沈黙の建物”で勝負

三月二三日 催し／講演会「聖書の旅」(講師…遠  
藤周作氏)

五月一一日 聖母マリアと文学／(武田友寿)

五月二八日 教会・わが家・社会をつなぐカトリ  
ック放送／(曾野綾子)

五月二五日 教会一致の姿を示す 万国博キリス  
ト教館の催し物

七月二七日 万国博キリスト教館 参加意義示す  
物をプロデューサーが計画説明

九月二八日 万国博キリスト教館 オルガンコン

クール

精神面でテーマ強調 日本万国博キ  
リスト教館プロデューサーが声明書  
造反にゆらく日教団 信仰の核心  
に迫る問題点／(白木信夫)

遠藤周作氏の書おろし劇”薔薇の  
館”を公演

一〇月二日 日曜ハイライト／近づく万国博 キ

リスト教館プロデューサーの苦心

一〇月二六日 宗教と文学の間(二) 現代文学と

聖書／(武田友寿)

二月 七日 (広告) 武田友寿 『遠藤周作の世界』

中央出版社

二月一四日 (広告) 武田友寿 『遠藤周作の世界』

二月二一日 (広告) 武田友寿 『遠藤周作の世界』

昭和四五年

一月 四日 (広告) 武田友寿 『遠藤周作の世界』

二月 一日 (広告) 武田友寿 『遠藤周作の世界』  
大都市なみの賑わい お客さんの多

い 軽井沢教会(※遠藤家ミサ参列)

(広告) 武田友寿 『遠藤周作の世界』

二月 八日 宗教と文学の間(五) 遠藤文学と私／

(武田友寿)

三月一五日 万国博は始まった 議論より一致協

力のとき

三月二九日 宗教と文学の間(四) 最近の宗教小

説／(武田友寿)

五月一七日 (広告) 『カトリックグラフ』創刊号

(聖母との契約)

五月二四日 (広告) 武田友寿 『文学と人生』中央

出版社

五月三一日 (広告) 『世紀』六月号(中野記偉「G・

グリーンと日本の作家たち(二) 遠藤周作

の場合)

六月 七日 (広告) 『世紀』六月号

万国博キリスト教館 訪ねてみた感

想 沈黙だけでは意味がない／(浜

尾実)

八月一六日 宗教と文学の間(七) キリスト教

の土着化をめぐる／(武田友寿)

九月 六日 (広告) 武田友寿 『遠藤周作の世界』

九月二七日 恩寵の世界求めて 光の証人の作家

モーリヤック／(武田友寿)

一二月二五日 武田氏に”亀井賞” 遠藤周作の

世界”で

一二月二二日 (広告) 武田友寿 『遠藤周作の世界』

一二月 六日 (広告) 武田友寿 『宗教と文学の接点』

中央出版会

一二月二〇日 変わらぬ問題意識 第二回亀井賞を

昭和四六年

受賞して／（武田友寿）

一月二四日（広告）武田友寿『宗教と文学の接点』

一月三二日 カトリック放送センター 東京三軒

茶屋で活動始める

宗教と文学の間（八）小説とエッセ

イとのきずな／（武田友寿）

三月 七日（広告）武田友寿『宗教と文学の接点』

三月一四日（広告）武田友寿『宗教と文学の接点』

弱者を強者と対比 迫害時代の信仰

にメス 話題呼ぶ遠藤周作切支丹の

里／（月田光一）

巧妙に語り掛ける 劇 薔薇の館／

（矢代静一）

四月 四日（広告）『切支丹の里』人文書院

（広告）ジム・ビショップ著 三浦朱

門訳『キリストが死んだ日』荒地出

版社（※遠藤評）

四月一日（広告）『カトリックグラフ』五月号

（遠藤周作の「薔薇の館」評判記）

五月 二日（広告）『カトリックグラフ』五月号

（「薔薇の館」誌上再録）

五月二三日 YBU運動における電波媒体の実情

キリスト教の愛伝える 聴取者から

多大の支持

心のともしびに期待 なまのことは

が人生を教える／（ニッポン放送編成

局長 羽佐間重彰）

六月二七日（広告）『世紀』七月号（中野記偉「沈

黙」へのアプロウチ）

七月二五日（広告）『カトリックグラフ』既刊七

ツト販売

一〇月 三日（広告）『世紀』一〇月号（佐古純一郎

「たった一枚の踏絵から」）

一〇月一〇日（広告）『カトリックグラフ』一〇月

号（「沈黙」に賭ける男）

一〇月三一日 映画「沈黙」のねらい 篠田監督に

インタビュー 受難を浮き彫り 人

間の誠実にひかれる

（広告）『カトリックグラフ』一一月

号（「沈黙」誌上試写会）

一一月 七日（広告）SILENCE 東宝

踏絵／（遠藤周作）（※YBU善き牧者運

動本部・提供）

五月一四日 健全な世論の形成 きよう世界広報

の日

テレビ「巡礼の旅」帰国 教皇謁見

番組にも成功 心のともしび

一〇月二二日（広告）責任編集「遠藤周作・椎名麟

三『現代日本キリスト教文学全集』  
全一八巻 教文館

一二月 五日 秋に静かな波紋 キリスト作家が全集刊行／(武田友寿)

一二月 三日 (広告)『現代日本キリスト教文学全集』全一八巻

昭和四八年 一月二二日 (広告)『現代日本キリスト教文学全集』全一八巻

二月二一日 座談会やドラマも 『心のともしび』放送で計画

二月二八日 (広告)『現代日本キリスト教文学全集』全一八巻

三月二一日 陽を浴びて開館 故岩下神父の遺志 継いで 新装なった真正会館ビル

三月二八日 (広告)『現代日本キリスト教文学全集』全一八巻

三月二五日 (広告)『あけぼの』四月号(開眼)

五月二〇日 (広告)『現代日本キリスト教文学全集』全一八巻

八月 五日 注意すべき小説の一面性 遠藤周作 『死海のほとり』／(門脇佳吉)

八月二六日 書研究者の立場から一／(堀田雄康) 『死海のほとり』のイエズス像―聖

九月 九日 書研究者の立場から二／(堀田雄康) 『死海のほとり』のイエズス像―聖

九月一六日 書研究者の立場から三／(堀田雄康) 『死海のほとり』のイエズス像―聖

一〇月 七日 遠藤周作・芥川比呂志のコンビで 『雲』第三五回公演

一一月二八日 心のともしび全国放送表 一一月

一一月二五日 心のともしび全国放送表 一二月 遠藤周作 イエスの生涯／(門脇佳吉)

『死海のほとり』をめぐる対談から 上 作者の真意はどこに(遠藤周作)

×矢代静一×ハヤット神父

一二月 二日 『死海のほとり』をめぐる対談から 下 作家としての聖書解釈(遠藤周作)

×矢代静一×ハヤット神父

一二月 九日 (広告)『現代日本キリスト教文学全集』全一八巻

昭和四九年 二月二〇日 教皇庁から叙勲 小林、高津、上田三氏に

三月一〇日 遠藤周作氏の評判 ベストセラーの秘密伝える「フィデス」



六月 二日 現代演劇協会・青少年名作劇場 遠藤周作「黄金の国」を上演 2／9 日 三百人劇場

六月三〇日 (広告)『現代日本キリスト教文学全集』全一八巻

八月 四日 (広告)『現代日本キリスト教文学全集』全一八巻

十一月一日 文学の広場(二)日本のキリスト者作家たち／(武田友寿)

【注記】

1 フランス留学を報じた記事(昭和二四・一二・一八、昭和二五年・六・

一八、「赤ゲットの佛蘭西旅行」広告(昭和二七・一・二七)、母郁の記事(昭和三〇・四・一七)については、図録『第五回企画展 遠藤周作とフランス』(長崎市遠藤周作文学館、平成二一・二)に活かした。

2 『沈黙』の碑建設の経緯等については、下野孝文・山下静香「遠藤周作と長崎、ある大きな力で——「とら寿」大竹豊彦氏に聞く」(第三期『紋説』平成一四・一二)を参照されたい。

3 「愛しえぬ人々」は昭和二〇年発表、翻訳は昭和二八年に新潮社から二宮孝顕訳「愛されぬ人々」(『現代フランス戯曲叢書 アスモデ・愛されぬ人々』所収)が出された。「ファリザイ女」は昭和一六年発表、昭和二八年に柳宗玄訳『パリサイ女』(新潮文庫)が刊行された(浜崎史朗「モリーヤック略年譜・書誌」(『モリーヤック著作集 第六巻』春秋社、昭和五八・八所収)など参照)。

4 加藤宗哉(解説) 評論家と小説家が同居した作家(加藤宗哉・富岡幸一郎編『遠藤周作文学論集 文学篇』講談社、平成二一・一一)三四八頁。この著作については、笠井秋生「講演」『文学とキリスト教——遠藤周作をめぐって』(『キリスト教文学研究』平成一五・五)に指摘がある。

5 存在が注目を浴びたのは没後だが、中野記偉「苦しみと文学的神の役割——遠藤周作 堀田善衛 G・グリーン」(『逆説と影響——文学のいとなみ——』笠間書院、昭和五四・四)が既に重要な新資料として紹介していることを、笠井秋生(注四に同じ)、山根道公(『遠藤周作——その人生と「沈黙」の真実』(朝文社、平成一七・三、五一頁)が指摘している。

6 山根道公 注五に同じ、一九頁

7 加藤宗哉『遠藤周作』慶應義塾出版会、平成一八・〇、五七〜五九頁。山根道公 注五に同じ、六三〜六九頁。久松健一『原稿の下に隠されたもの』笠間書院、平成二九・七、一九六〜一九七頁。

8 久松健一 注七に同じ、一五四頁

9 山根道公 注五に同じ、五五頁

10 遠藤周作「火山」(『文学界』昭和三四・一・一〇)、引用は『遠藤周作文学全集 第一巻』新潮社、平成一一・四、二七五頁に拠った。

11 山根道公「資料編 遠藤周作年譜・著作目録」(『遠藤周作——その人生と「沈黙」の真実』)掲載の昭和二二〜三三年の著作は評論八件である。その他、昭和二二年の創作として、母が勤めていた小林聖心女子学院新制高校三年生の卒業劇のために創った戯曲「サウロ」がある。没後に発見され『新潮』(平成一二・六)に掲載された後、『遠藤周作文学全集 第一四巻』(新潮社、平成一二・六)に収められた。

- 12 『婦人画報』(昭和三三・四〇、昭和三四・五) 初出
- 13 山根道公「母・郁と周作の年譜」(遠藤周作著 山根道公監修『落第坊主を愛した母』海竜社、平成一八・九)によれば、郁は、昭和二三年三月、宝塚市の小林聖心女子学院の音楽教師の職を辞し、カトリックダイジェスト社ビルに移り住み、編集発行の仕事に携わった(二〇四頁)。
- 14 山根道公 注五に同じ、八二頁
- 15 同書は昭和二九年の刊行。久松健一 注七に同じ、二〇九頁
- 16 遠藤の名前や作品名に少し触れただけの記事も含む。
- 17 加藤宗哉 注七に同じ、一六三頁
- 18 資料合綴により、末尾は「共」までしか判読できなかった。
- 19 片岡弥吉『踏絵——禁教の歴史』日本放送出版協会、昭和四四・六 一六七〜一七一頁
- 20 遠藤順子『夫・遠藤周作を語る』文藝春秋、平成二五・九 一一八頁
- 21 増田斎(「踏絵」と「転向」の交差 遠藤周作『沈黙』と大阪万博キリスト教館出展問題」(坪井秀人編『戦後日本文化再考』三人社、令和一・一〇 所収) 四二〜四四頁
- 22 加藤宗哉 注七に同じ、一六四頁
- 23 山根道公 注一一に同じ、四六四頁
- 24 おそらく「最後の殉教者」(『別冊文藝春秋』昭和三四・二)として結実する。長崎市遠藤周作文学館所蔵の助野遠藤宛て書簡(昭和三九・八・一九消印)には、『沈黙』(新潮社、昭和四一・三)に登場する「フェレイラ忠庵とキヤラ三右衛門の皮肉な運命の巡り合せをドラマになさる由」との記述もある(図録『第九回企画展 刊行から五〇年——遠藤周作『沈黙』と長崎』長崎市遠藤周作文学館 平成二八・五 一八頁)。
- 25 遠藤周作「現代人に」沈黙」の回復を 万国博基督教館を担当して(「読売新聞」昭和四四・六・八)
- 26 増田斎 注二に同じ、四〇四〜四〇七頁
- 27 「カトリック新聞」昭和四三・五・二二
- 28 「カトリック新聞」昭和四三・五・二六
- 29 遠藤周作・小川圭治・熊沢義宣・佐古純一郎「座談会 神の沈黙と人間の証言 遠藤周作『沈黙』をめぐって」(『福音と世界』昭和四一・九)
- 30 遠藤周作「『沈黙』の部屋 万国博の中の劇場」(現代演劇協会機関紙『雲』第一九号、昭和四四・三)。引用は、遠藤周作『観客席から 芸術エッセイ』番町書房、昭和五〇・六 一五八頁に拠った。
- 31 浜尾実「万国博キリスト教館 訪ねてみた感想 沈黙だけでは意味がない」(「カトリック新聞」昭和四五・六・七)
- 32 遠藤周作 注二五に同じ

(九州産業大学特任講師)